

●『東方』二八六号より

魔術と蒼蠅——舞台の上の裁判官

須藤 洋一

数年前、「ヒーローたちの中国」と題して、架空実在、計十二人の英雄の話をしたことがある。古代から現代まで、中国人はどんな理想像を生み出してきたか、そこにかからのどんな思想や感情が表現されているのか、探ってみようというのである。

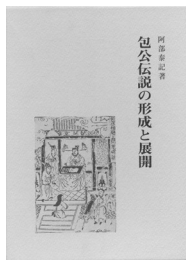
一番手は治水の神として知られる禹、つづいて孔子に老子、やがて西門慶や賈宝玉も登場、というのだから、学生の中には首をかしげた諸君もいたようだが、それはともかく、講義のはじめにアンケートを採り、「君たちのヒーローは誰か」と訊ねて、名前の挙がった古今東西、数十人の傑物のうち、断然他を引き離して首位の座に輝いたのは、諸葛孔明であった。いうまでもない（知）の英雄である。

ところでその折、わたしは同じ質問を中国人の教師にもぶつけてみたのだが、そのなかの一人は即座に、「包公！」という答えを返してきた。正史に伝をもつ北宋の官僚、包拯（九九九—一〇六二）である。わたし自身は、予定した十二人のなかですでに折り込み済みであったから、別段驚きはしなかったが、しかし一方、学生たちの回答のなかに、「包公」の文字は皆無であった。おそらくは、判断以前の問題であったに違いない。

中国では「包公」は国民的英雄である。地方官や朝廷の高官、あるいは首都開封府の知事として腕を振るい、皇帝に政治のありかたを説き、権力の座にある寵臣を批判した。峻厳、剛直な気性で、役人の不正と苛酷を憎み、訴訟への役人の介入——賄賂の温床——を排除した。清廉、

阿部泰記著

包公伝説の形成と展開



A5判 592頁
汲古書院 [12600円]

篤実、質素を旨とし、衣食住すべて無官の時代に変わりなく、私信その他、友人との交わりも断つたというから、並大抵の禁欲ではない。

包拯の物語は、早くから「公案」（裁判物語）のかたちをとって語り物となり、やがて文字化され、舞台上に上り、絵画に描かれ、長篇小説となり、劇画やテレビドラマとなつて、現在にいたる。そこで宋代のみならず、いまなお、包拯は「女子供」にも名を知られつづけているのだが、この種の「国民的英雄」が、日本と中国双方で、たがいにまったく認知されていない現象については、金海南「水戸黄門「漫遊」考」（新人物往来社、一九九九年）に詳しい分析

がある（この書は題名と著者の韜晦のためか、「包公」研究史のなかに正當に位置づけられていない）。

長年、「包公」に関する論文を発表しつづけてきた阿部泰記氏が、その集大成の著書『包公伝説の形成と展開』に、あえて研究書と一般書（啓蒙書？）という、二重の性格をあたえた背景にも、おそらくは以上に記したような、いびつな状況が関係していたに相違ない。研究書というのは、学位論文に筆を加えて出版された、この大著の成立事情によるのであり、一般書としての性格は、第一章から最終第五章にいたる章名「民衆から生まれた清官」「説話の主人公とともに」「あらゆる事件をさばく」「より強力な忠臣とし

て」「死してなお民衆を護る」という、およそ学術書には不似合いなタイトルに容易に見てとることができる。専門用語への律儀な注釈、それぞれの原文に施された丁寧な訳もまた、同じ姿勢の現われにほかならぬだろう。

阿部氏と「包公」研究との関わりは、氏が赴任先の大学で徳山毛利家旧蔵漢籍の『百家公案』および『龍図公案』を発見し、『防長漢籍目録』を編むに際して、これらの解説を担当したことに始まる。一九八〇年代半ばのことである。以後、氏はテキストの成立、刊行順序といった書誌学的な問題から、「包公案」の思想、なかでも包公伝説の核心ともいえるべき神秘的な能力——「昼は現世を裁き、夜は冥

界を裁く」——の考察へと進み、「説唱詞話」（明代中期の成化年間、北京で刊行された語り物のテキスト。一九六七年、上海近郊の明代の墓から発見された）に触れる。

「包公の鉄面無私の頑固な性格は元曲でも歌詞に表現されていたが、民間の語り物が特権階級の不正を許さぬ人間離れした特異な容貌を持つ人物を創造したことには驚異を覚えた。民衆は包公に絶対的な信頼を寄せ、万能の力を付与したことが分かった。元曲でも冤罪による死者の訴えを聴いてほしいという民衆の願望が表現されていたが、「説唱詞話」では包公は天意を代表して、妖怪の犯罪や天子の不孝をも裁くようになったのである」

(本書「あとがき」)。

民衆による超人的「清官」像の形成、という認識である。こうした理解のおもむくところ、氏は包公信仰の実態調査、具体的には台湾、安徽省合肥(包拯の故郷)、河南省開封ほか、各地に残る包公廟への行脚を開始し、これと平行して、地方劇のテキストの収集に乗り出す。本書の主要な部分を構成するのは、この二方面にわたる研究——行脚と収集——の成果であり、本書の大きな特徴もまたそこにある。

すなわち、阿部氏は、「包公」を主人公とする大量の演劇のテキスト(京劇ほか、上海越劇、河南・豫劇、陝西・秦腔、安徽・泗州戲、湖北・楚劇、広西・桂劇など、二十四の省の地方劇)および宝卷、唱本の類を探索し、そのあらすじを一つ一つ示すことによって、包公伝説が、北は黒龍江省から南は雲南省まで、東は沿海部から西は甘粛省まで、ほとんど中国全土に、しかも予想外の内容で広がることを明らかにし(第一の功績)、現地調査および地方志等によって、包拯を神とする信仰が、

物語同様、中国の全域に及んでいること、そこでは説唱文学、演劇、小説が、民衆の信仰に大きく影響していることを明らかにした(第二の功績)のである。

実際、本書に示された膨大な量の物語群は、従来、われわれが思い描いていた包公物語の大河——宋代の語り物、元の雜劇、明の説唱詞話、短篇小説集、清代の語り物、長篇小説。あるいは、公案小説から武俠小説へ——を、まるで、か細い流れであるかのように錯覚させるほどだ。

それでは、理想像としての「包公」とその物語は、地域的な拡大や、それ自体の膨張のなかで、どのように変化したか。あるいはその変化を、阿部氏はどのように記述しているか。

氏によれば、「包公」の裁判説話の大きな魅力は、「皇帝を含めてどんな権力者の犯罪をも毅然として裁き、弱者である庶民を救済する」ところにある(二六頁)。懲罰と救済が包公伝説の核心であり、宋代、「閻魔」になぞらえられた包拯は、元代、北方の雜劇(および南方の

戲文)のなかで、「邪悪な権力者と闘う清廉な官吏の代表」となり、亡霊の姿を見る力、すなわち「殺害された被害者の霊魂の訴えを聞く超能力」をあたえられる。「包公」の役割は「殺害された被害者に代わって恨みを晴らす」ことにあり、亡霊が復讐を図り、「包公がそれを代行する」のが「包公」の裁判劇の特徴とされるのだが、この構図は、明、清から民国、現代へとつづく展開、それも夥しい地方劇のなかで、大幅な変容を見せる。その「包公」像あるいは物語の変容のなかで、わたしが深く印象づけられたものは二つ。

第一、「包公」は、「死者を裁く能力」だけでなく、「死者を蘇らせる能力」をも身につける。明の「説唱詞話」に、わずかに見える、宝物による死者復活は、現代の地方劇ではほとんど当たり前のようになる。宝物というのは、温涼帽、還魂珠、還陽帶など。「包公」はこれらを用いて被害者を生き返らせ、一家に団圓の幸福をもたらすのである。この「包公」像は、ほとんど魔術師ないし神仙という

に近い。

第二、「包公」は人間のみならず、神々や動物の世界にも多くの援助者をもつ。これは、「官が冤罪を加えれば、天が警告を与える」、「天意はしばしば神格化して発現する」(八一、八三頁)ためであり、援助者として登場する神々、ないし動物は、天帝、太白金星(これはおなじみ)、雷神、風神、閻魔から観音菩薩(最も出番が多いという)、孫悟空(一)、鍾馗、果ては白馬、虎、鼠など三十数種。

なかでも愉快なのは、蒼蠅——ときに天神または蒼龍神の化身とされる——の活躍で、われわれには「うるさい」だけのこの虫は、元の雑劇で開封府長官の筆を妨げ、冤罪を悟らせるのを皮切りに、現代にいたる多くの芝居に登場し、主人公の首に群がって処刑を妨げる、処刑の刀を押さえ、あるいは破壊する、犯人の名を記す、判決文の執筆を妨げる、などして「包公」らに冤罪と真犯人の存在を告げるのである。首に群がる、筆の先にまといつく——悟空の変身を思わせる、小さなものゆえの芸当であり、阿部氏は

そこにも天意の現われがあるという。

「包公説話においては、包公は最終的に登場して主人公を救う役割を果たすが、包公の審判を支援する神や人が登場するという構造を持っている。(略)包公は天意を承けて現実的に主人公を救出する役割を果たしているものであり、大局から見れば包公の裁判は神判だと言っても過言ではない」(八〇—八一頁)。

本書は、膨大かつ地道な作業にもとづく真正正銘の労作である。学術書として、大きな貢献を果たした——たとえば、小説のありかたと演劇のそれとの違い、といった問題を考えるうえでも役に立つ——ことは疑いない。しかし、一般読者への氏の配慮にもかかわらず、本書は必ずしも読みやすいものではない。最大の原因は、氏が第二章以下、「包公」をはじめとする登場人物の肉声と、論理的な冒険とを封じてしまったことにあるだろう。この点に関して、氏は極めて禁欲的であって、読者はこの書物から、かれらのおしゃべりも、また著者自身の生々しい声も、ほとんど聞き取ることができない

(例外が数カ所。さて……)。

わたしの愛する「包公」の物語は、性と暴力(いずれも少々)と多くの饒舌、諧謔に満ちている。これもまた、包公伝説の一つの流れであり、ある種の人々の選択であるに違いない。当初、わたしがこの一文に用意してボツにした副題は、「包公は酒を片手に語るべし」というのである。

(北海道大学)